HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北東ユーラシア諸言語の名詞項標示
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方言語研究, 4, 1-4
Issue Date	2014
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55100
Type	other
File Information	nls-4-01.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 4: 1- 4（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2014）

［特集　名詞項標示］

北東ユーラシア諸言語の名詞項標示*

江 畑　冬 生
（新潟大学）

1. はじめに

本特集では，ユーラシア北東部に分布するアリュートル語（チュクチ・カムチャッカ語族），コリマ・ユカギール語（系統不明），サハ語（チュルク諸語）の 3 つの言語の名詞項標示について考察する（サハ語についての江畑論文では，同系のトルコ語およびトゥバ語についても取り上げる）．各論文では，当該言語の名詞項標示を決める様々な要因を整理することを目的とし，複数の要因が複合的に関わっている点，要因の優先順序が言語ごとに異なっている点にも注目する[1]．本稿では，個別言語を考察対象とする 3 つの論文に対する導入を行う．

本特集では，自動詞主語(S)・他動詞主語(A)・他動詞目的語(O)の 3 つを名詞項と総称する（なお Dixon (1994: 7) や Dixon (2010: 122) は，S, A, O の 3 つを「中核項」(core argument) と呼んでいる）．名詞項の標示がどのように決まるのかは，当該言語の記述にとって基本的かつ重要な問題である．

ある名詞項に対し 2 通りまたはそれ以上の標示が可能な言語がある．特に O に対して複数の標示が可能な言語数は多い．Bossong (1985) や Aissen (2003) などの研究ではこれを DOM (differential object marking) と呼んでいる．本特集で取り上げる 3 つの言語のうち，サハ語（および他のチュルク語）は典型的な DOM 言語である．コリマ・ユカギール語は DOM 現象を有すると共に，S にも複数通りの標示が可能である．アリュートル語は DOM 言語そのものではない．しかしながら，アリュートル語において対象を表す名詞句は，他動詞と共に現れる場合には絶対格で現れ，自動詞と共に現れる場合には斜格で現れる．同じ意味役割を持つ名詞句が，動詞の自他により異なる格で標示されうる点では，DOM 言語と似た側面を持っている．

ある名詞項に対する標示の決定を，単一の要因により記述できるに越したことは無い．DOM 言語の記述では，定性 (definiteness) や特定性 (specificity) などの単一の語用論的要因により名詞項標示が決まるのだと主張されることがしばしばある．しかし言語の実際を観察すると，語用論的要因だけでなく，形態法・統語法・名詞句タイプの違い・情報構造など，名詞項標示の決定には様々な要因が同時に関わっている．本特集で取りあげる 3 つの言語の名詞項標示の決定にも，以下のような要因が（時には複合的に）関与している．

* 本特集中の論文は，日本言語学会第 146 回大会（2013 年 6 月 15 日茨城大学）におけるワークショップ「ユーラシア北東部諸言語の名詞項標示」の内容に基づいている．査読者からの有益なコメントに深謝する．

[1] 北東ユーラシア地域に分布する諸言語の客体表示を扱った先駆的研究に池上 (1992) がある．風間 (2012) は池上 (1992) を高く評価すると共に，「統語表示に対する情報構造の重要性」を説いている．

2. 名詞項標示に関わる要因の概観

2.1 動詞の種別

動詞の自他は名詞項標示と大きく関係する．コリマ・ユカギール語とアリュートル語では，自動詞活用・他動詞活用の二種類の活用を区別する．アリュートル語にはさらに自他両用動詞がある. アリュートル語の自他両用動詞は, 名詞項標示の対応関係から 2 種類（S=A 型と S=O 型）に分けることができる.

2.2 形態統語法

形態法や統語法が標示決定の要因となることがある．一例を挙げると，目的語(O)の主要部に所有接辞が付加していることは，コリマ・ユカギール語の焦点構文において焦点接辞付加を妨げる要因であり，サハ語では主格目的語の成立を妨げる要因になっている.

2.3 名詞句タイプ

名詞句タイプ (NP type) とは，普通名詞・代名詞・固有名詞・疑問詞などの区別のことである（ただし管見の限りでは，名詞句タイプとは何かについて明確な定義を行った研究は無い）[2]．固有名詞を例にすると，コリマ・ユカギール語の焦点構文においては焦点接辞を付加することができず，サハ語では主格目的語として現れないなどの特性を持つ.

代名詞が常に定性を帯びるわけではないことに注意されたい．江畑論文では，サハ語の代名詞が不定代名詞（「誰か」「何か」など）の場合を含め必ず対格標示を受けることを示した．この事実は，代名詞であることと定性が相互に独立したパラメターであることを裏付けている.

2.4 名詞句の意味的・語用論的特性

有生性などの名詞句の意味的特性，定性・特定性などの名詞句の語用論的特性が名詞項標示に影響することがしばしばある．アリュートル語の S=A 型自他両用動詞の自動詞用法では，（他動詞用法での）O に相当する項にどの格が現れるのかを当該名詞句の意味的特性が決定する．アリュートル語では名詞抱合が起こった場合，ふつう，動詞の結合価が減る（それに伴い名詞項の標示パタンも変わる）．このとき，抱合される名詞は特定的であってはならないという制約を有する.

2.5 情報構造

情報構造が標示を左右することがある．コリマ・ユカギール語では情報構造のシステムが発達している. 焦点構文では，一部の例外的な名詞句を除き明示的な焦点接辞が現れる.

2.6 ‘local’ 対 ‘global’

ある名詞項の標示が当該名詞項の特性のみにより決まる場合を，local な要因と言う．こ

[2] 関連して Iggesen (2009) は case-symmetry と case-asymmetry の区別を行う. ロシア語やトルコ語は前者のタイプに属する（つまり名詞句タイプに関係なく対格形を有する）．一方で英語は，後者のタイプである（代名詞にのみ対格形がある）.

れに対しある名詞項の標示が節内の別の名詞項との関係性によって決まる場合を，global な要因と言う（詳しくは Malchukov and de Swart (2009: 348) を参照されたい．Comrie (1989) の第 6 章にも類似の説明がある）．先述の名詞句の語用論的特性は，local な要因により名詞項標示が決定する典型である．一方，local な情報だけでは標示が決まらないのは，人称や有生性の階層を考慮しなければならない場合などである．例えばコリマ・ユカギール語の定動詞文では，global な要因（主語・目的語それぞれが談話参与者か否か）により目的語に明示的標示がなされるか否かが決まる．

3. 名詞項標示と複合的要因

ある言語の名詞項標示は，単一の要因だけで決まるわけではない．本特集で取り上げた北東ユーラシア地域で話される 3 つの言語の名詞項標示についても，複数の要因を同時に考慮しなければならないことが明らかとなった．池上 (1992) では，この地域の 10 の言語の「動作対象の表示」について考察している．ただし各言語の記述にはわずかなページしか割かれていない．本特集では名詞項標示に関してそれぞれ異なる特徴を持つ 3 つの言語を取り上げ，2 節に示した諸要因について丁寧に記述を行った．各言語の名詞項標示の特性を筆者がまとめたものが以下である．

アリュートル語では，動詞の自他が名詞項標示を決定する大きな要因である．動詞の自他はふつう語彙的に決まっている．しかし永山論文は，これまで判明している以上に多くの自他両用動詞が存在していることを明らかにした．アリュートル語は動詞の結合価に関して厳密であり，使役・逆受動・抱合といった結合価の増減操作が比較的頻繁に行われる．ところが自他両用動詞はこれら結合価の増減操作を受けにくい．自他両用動詞では，動詞の結合価から名詞項標示が決まるのではなく，むしろ名詞項（絶対格で現れる O）の存在により結果的に動詞の結合価が決まる．

コリマ・ユカギール語では，主語にも目的語にも複数の標示選択肢がある．定動詞文と焦点構文の区別が重要で，定動詞文では対格型の標示パタン（O に明示的標示）が，焦点構文では能格型の標示パタン（S/O に明示的標示）が現れる．定動詞文の O に格接辞が付加するか否かには global な要因が関与し，どの格で現れるのかは local な要因により決まる（ただし長崎論文では，定性など一部の要因は傾向に過ぎないことも指摘した）．一方，焦点構文における焦点化された名詞項が例外的に主格で現れることがあり，やはり local な要因に条件づけられている（この時の local な要因は定動詞文の場合と適用範囲が異なっている）．

チュルク諸語の目的語(O)における対格接辞の有無は，定性または特定性と結び付けて論じられることが多かった．江畑論文では 3 つのチュルク語（サハ語・トルコ語・トゥバ語）について，語用論的特性だけが関与しているのではなく，言語ごとに異なる複数の要因が働いていることを示した．サハ語では形態的要因（複数接辞・所有接辞の付加）と名詞句タイプが強く働き，部分的に語用論的特性が働いている．トルコ語では統語的要因（動詞直前）に加え語用論的特性（定性）も働いている．トゥバ語では，少なくとも形態法・統語法・語用論的特性のみで記述することは不可能である．主語と目的語の意味的関係性も関わっている可能性がある．

参考文献

Aissen, Judith. (2003) Differential object marking: Iconicity vs economy. *Natural Language and Linguistic Theory*. 21, 435-483.

Bossong, Georg. (1985) *Empirische Universalienforschung. Differentielle Objektmarkierung in den neuiranischen Sprachen*. Tübingen: Gunter Narr.

Comrie, Bernard (1989) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*. [2nd edition] Oxford: Blackwell.

Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge Univeristy Press.

Dixon, R.M.W. (2010) *Basic linguistics theory. 1*. New York: Oxford University Press.

Iggesen, Oliver A. (2009) Asymmetry in case marking: nominal vs. pronominal systems. Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.) *The Oxford Handbook of Case*. Oxford: Oxford University Press. 246-257.

池上 二良 (1992) 「北アジア言語の動詞の構造と格支配：動作対象の表示に関して」 『北の言語 類型と歴史』 三省堂. 297-314.

風間 伸次郎 (2012) 「ツングース諸語その他に関する池上二良先生の功績」 『北方人文研究』5 号, 193-204.

Malchukov, Andrej and Peter de Swart. (2009) Differential case marking and actancy variations. Andrej Malchukov and Andrew Spencer (eds.) *The Oxford Handbook of Case*. Oxford: Oxford University Press. 339-355.

Core Argument Marking in the Languages of Northeastern Eurasia: An Overview

Fuyuki EBATA
(Niigata University)

This overview article provides an inroduction to the following three papers on the core argument marking of Alutor, Kolyma Yukaghir, and Turkic languages (Sakha, Turkish, and Tyvan). In these languages under discussion, case-marking for core arguments is not determined by a single factor, but rather multiple factors are simultaneously working. The factors examined here are the followings: transitivity, morphology and syntax, NP-type, semantic or pragmatic property, information structure, and local vs. global pattern.

（えばた・ふゆき　ebata@human.niigata-u.ac.jp）